

高等学校

平成 30 年度

教育研究員研究報告書

保健体育

東京都教育委員会

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の視点	2
III	研究仮説	3
IV	研究方法	4
V	研究内容	6
1	検証授業	
	実践事例 1	6
	実践事例 2	11
2	検証授業における成果と課題	17
3	アンケート分析	18
VI	研究の成果と課題	23

研究主題

運動やスポーツとの多様な関わり方を身に付ける体育理論の工夫
～生涯を通じて運動・スポーツを継続できる資質・能力の育成～

I 研究主題設定の理由

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改訂及び必要な方策等について（答申）」（文部科学省 平成 28 年 12 月）では、保健体育科における現行の学習指導要領の課題について、習得した知識や技能を活用して課題解決することや学習したことを相手に分かりやすく伝えること、運動する子供とそうでない子供の二極化が見られること、子供の体力について体力水準が高かった昭和 60 年ごろと比較すると低い状況が見られることなどが指摘された。答申の趣旨に従い、高等学校学習指導要領（平成 30 年 3 月告示）（以下、「新学習指導要領」と表記。）では、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続し、スポーツとの多様な関わり方を状況に応じて選択するとともに、卒業後も継続して実践することができるよう、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」（資質・能力の三つの柱）の育成を重視すること、体力の向上については、学習した成果を実生活や実社会に生かすこと及び運動やスポーツの習慣化を促す観点から、体育理論や保健との関連、教科外活動や学校生活全体を見通した教育課程の工夫を図ること、体育の知識については、運動の実践及び生涯スポーツにつながる概念や法則などの汎用的な知識等の定着を図ることが重要であり、動きの習得を通して一層の知識の大切さを実感できるようにすることが必要であること、さらに、「する」、「みる」、「支える」、「知る」といった生涯にわたる豊かなスポーツライフを継続していく資質・能力の育成に向けて、体育理論の学習の充実はもとより、学習する領域が有する特性や魅力を理解すること、運動実践につながる態度の形成に関する知識を理解すること、保健との関連を図ることなど、知識を基盤とした学習の充実が必要であることが示されている。

体力は人間のあらゆる活動の源であり、健康の維持の他意欲や気力といった精神面の充実にも深く関わり、「生きる力」の重要な要素である。子供たちの体力の低下は、将来的に国民全体の体力低下につながり、社会全体の活力や文化を支える力が失われることにもなりかねない。

平成 29 年度全国体力・運動能力、運動習慣等調査（以下、「全国体力調査」と表記。）の結果では、子供の体力については、低下傾向に歯止めが掛かっているものの、昭和 60 年ごろと比較すると、以前として低い状況が見られるとともに、運動する子供とそうでない子供の二極化が見られる。また、東京都の中学生、高校生においては、全国と比較すると体力は依然低い水準である。

全国体力調査の中学生の結果から、「運動やスポーツが好き」と回答した生徒の体力合計点の関連を見ると、男子の体力合計点は全国平均 42.0 点に対して、「好き」と答えた生徒の平均は 45.1 点、「やや好き」は 38.1 点、「やや嫌い」は 33.5 点、「嫌い」は 31.9 点であり、女子も同様に回答群毎の体力合計点の平均に差があった。さらに、総合評価 A の生徒が最も肯定的な回答をした割合を全国平均と比較したところ、全国平均を上回り、その差が大

きい項目は、①運動やスポーツをすることは好きですか（全国平均との差（ポイント）男子 26.4、女子 31.7）、②あなたにとって運動・スポーツは大切なものですか（男子 23.7、女子 26.2）、③中学校を卒業した後、自主的にスポーツをする時間を持ちたいと思いますか（男子 19.5、女子 21.2）、④保健体育の授業は楽しいですか（男子 18.8、女子 20.4）等であった。運動・スポーツに対する肯定的な感情により、主体的に運動・スポーツに関わり、体力の向上にもつながっていると考えられる。

第2期スポーツ基本計画では、学校における体育活動を通じ、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育てるとともに、放課後や地域における子供のスポーツ機会を充実することを施策目標とし、その結果として、自主的にスポーツをする時間を持ちたいと思う中学生を80%（平成29年度現在64.5%）にすること、スポーツが「嫌い」・「やや嫌い」である中学生を半減（平成29年度現在16.4%）すること、子供の体力水準を昭和60年頃の水準まで引き上げることを目指している。

高等学校保健体育科では、小学校から高等学校までの12年間の一貫した教育課程の最終段階として、体を動かすことを通して、心と体が一体であることや体力の高まりを実感したり技能を獲得したり課題を解決したりするなどの過程を通して、合理的な運動の行い方や体力の高め方などの知識の重要性を認識させ、動きの獲得や技ができる喜びなどの各領域特有の特性や魅力を深く味わうとともに、公正、協力、責任、参画、共生などの社会的態度を養い、スポーツの文化的価値などに対する理解を深め、現在及び将来の実生活や実社会で計画的、継続的に運動やスポーツを実践するための資質・能力を育む指導の充実が求められる。

本研究では、このような状況を踏まえ、生涯を通じて運動・スポーツを継続できる資質・能力の育成を「主体的・対話的で深い学び」により実現することを目指した。

生涯を通じて運動・スポーツを継続できる資質・能力の育成のためには、「体育理論」を効果的に実践し、運動・スポーツへの多様な関わり方（する・みる・支える・知る）を状況に応じて選択できる力、健康や体力の状況に応じて自ら体力を高める能力を育む授業改善が有効であると考えた。

以上のことから、本研究の主題は、「運動やスポーツとの多様な関わり方を身に付ける体育理論の工夫～生涯を通じて運動・スポーツを継続できる資質・能力の育成～」とした。

Ⅱ 研究の視点

1 体育理論のカリキュラム・マネジメント

新学習指導要領では、体育理論の内容に加え、各領域との関連で指導することが効果的な技術や名称や行い方、課題解決の方法などについては、各領域の「知識及び技能」に示し、体育理論では、主に概念的、理念的な知識を中心に取り上げ、指導方法の工夫などにより確実に習得させるようにすること、各領域との関連で指導することが効果的な内容については、各運動に関する領域で具体的事項を中心に実践的に取り上げ、運動に関する領域と体育理論を相互に関連付けて学習させることにより、知識の重要性を一層実感できるように配慮する必要があることが示されている。

本研究では、運動に関する領域と体育理論を相互に関連させて指導することを重視し、運動に関する領域の単元計画の中に体育理論を効果的に位置付け、検証授業を実施する。

2 協働的な学びの工夫

都統一体力テストの結果では、保健体育の授業で「できなかったことができるようになったきっかけ、理由」では、「友達に教えてもらった」が最も多く、高1男子 50.1%、女子 67.4%、高2男子 45.4%、女子 62.6%、高3男子 42.4%、女子 59.0%となっている。また、全国体力調査の中学生生徒の結果では、「『授業での話し合い』を行っている」と答えた生徒は、「体育の授業が楽しい」と答えた生徒のうち男子 58.4%、女子 57.2%であるのに対して、「体育の授業が楽しくない」と答えた生徒のうち、男子 19.7%、女子 20.2%であった。「『授業での助け合い、役割を果たすこと』を行っている」と答えた生徒は、「体育の授業が楽しい」と答えた生徒のうち男子 62.3%、女子 70.4%であるのに対し、「体育の授業が楽しくない」と答えた生徒のうち男子 19.9%、女子 20.2%であった。上記の結果から、授業の中で生徒同士が関わり、教え合いや話し合い活動をしたり、助け合いやそれぞれの役割を果たすような活動をしたりすることは、体育の授業を楽しみ感じたり、技能を上達させたりするために重要であることがわかる。

本研究では、話し合い活動等の協働的な学びの工夫を通して、協働的な関係を育むことや、自己の思考を広げたり深めたり、他者に伝える力を育む深い学びを目指して授業を実践する。

3 多様な関わり方に気付かせる工夫

新学習指導要領では、体力や技能の程度、年齢や性別、障害の有無に関わらず、運動やスポーツの特性や魅力を実感したり、運動やスポーツが多様な人々を結び付けたり豊かな人生を送ったりする上で重要であることを認識したりすることが求められている。各種の運動・スポーツが有する楽しさや喜び、体力向上などの視点から、自己の適正等に応じた多様な関わり方を見いだすことができるようにするための指導の充実を図ることが、社会での実践につながり上で重要なものであることが示されている。

本研究では、運動・スポーツへの多様な関わり方に気付かせるための「体育理論」の工夫により、運動に対する肯定的感情や、運動経験及び運動技能の差に関わらず、生徒一人一人が自己に適した運動・スポーツへの関わり方を選択できる力を育むことを目指す。

Ⅲ 研究仮説

生涯にわたる豊かなスポーツライフを卒業後も主体的に実践できるようにするためには、運動・スポーツの価値や文化的意義を学ぶ体育理論の学習の充実はもとより、学習する領域が有する特性や魅力を理解すること、運動実践につながる態度の形成に関する知識を理解することなど、知識を基盤とした学習の充実が必要である。また、運動・スポーツが好き・嫌いという感情は、保健体育の授業の体験によって左右される部分が大きく、運動習慣にも多大な影響を与える。保健体育の授業において、運動に対する肯定的感情を高めることは、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続するために重要なことである。

本研究では、「体育理論」を運動に関する領域と関連付けて学習させる工夫をすることにより、運動・スポーツに対する理解を深め、楽しさや有能感を与えるとともに、多様な関わり方を学ばせることができ、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現が可能となると考えた。

IV 研究方法

1 年間指導計画における体育理論のカリキュラム・マネジメント

「体育理論」を運動に関する領域と相互に関連させて学習することを重視し、運動に関する領域の単元指導計画の中での位置付けや内容について検討し、単元指導計画及び学習指導案等を作成する。また、系統性をもたせるために、入学年次から卒業年次までの「体育理論」の単元指導計画例を作成する。

2 検証授業の実施

2校で検証授業を実施する。検証授業では、対象学年を1学年（入学年次）と3学年（卒業年次）とし、1学年はソフトボール、3学年はサッカーで、それぞれの運動領域と関連付けた1単位50分間の「体育理論」の授業を実施する。

検証授業においては、①運動への多様な関わり方を学ぶために、「する・みる・支える・知る」の中でも特に「支える」に視点を置き、多様な関わり方について気付くことができる活動を取り入れる。②関わりの中での学びを実現するために、話し合いの場を設定する。③生徒の学習がより深いものになるよう効果的にICTを用いる。以上3点について、研究の視点に基づいた授業を実施する。

3 アンケートの実施

体育理論の授業と関連付けて行う運動領域の単元実施前と単元終了後に、運動・スポーツに対する意識、実施状況、運動領域に関する知識、卒業後の運動・スポーツへの関わり方についてのアンケート調査を実施する。特に、体育理論の授業実践により、生徒の運動・スポーツへの意識や卒業後の運動・スポーツへの関わり方等への変容について分析する。

研究構想図

共通テーマ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善

研究主題

運動やスポーツとの多様な関わり方を身に付ける体育理論の工夫
～生涯を通じて運動・スポーツを継続できる資質・能力の育成～

〈保健体育の授業に求められること〉

- 体力や技能の程度等に関わらず、運動やスポーツの楽しさを味わわせることができる授業
- 知識及び技能を獲得させる授業
- スポーツへの多様な関わり方に気付かせる授業

効果的な体育理論

1 体育理論のカリキュラム・マネジメント

運動領域と体育理論を関連付け、知識の重要性を実感させる

2 協働的な学びの工夫

話し合い活動等で協働的関係を育み、対話により思考を広げ深める

3 多様な関わり方に気付かせる工夫

自己の適正に応じた関わり方を見い出し実践する力を育む

〈教師の指導の工夫〉

- ICT機器の活用
 - 運動に対して苦意識をもつ生徒の運動有能感を高め、技能や体力を向上させる
 - 公正、責任、健康安全等の内容を身に付けさせる
 - 自己や他者の課題発見、解決に向けて、技術や戦術に関する気付きを得られるようにする
- 【評価の観点】知識及び技能、思考力、判断力、表現力等、学びに向かう力、人間性等

生徒の変容

- ①運動・スポーツに対して理解が深まる
- ②楽しさや有能感を感じる
- ③多様な関わり方を学ぶ **☆する ☆みる ☆支える ☆知る**

主体的・対話的で深い学びの実現

スポーツが好き！という感情

生涯を通じて運動・スポーツを継続できる資質・能力

- ①多様な関わり方（する・みる・支える・知る）を状況に応じて選択できる
- ②健康や体力の状況に応じて自ら体力を高める能力

豊かなスポーツライフ

○研究の方法

- ①体育理論を効果的に実践するための保健体育「体育」のカリキュラム、単元計画、授業案、学習カード、教材（ICT教材等）を作成し、検証授業を行う。
- ②アンケート調査や授業実践のデータ（学習カードの内容、授業記録など）を分析し、検証・考察する。

V 研究内容

1 検証授業

実践事例 1

(1) 単元名 体育理論（第1学年）

(2) 単元の目標

ア スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について理解できるようにする。

イ 運動やスポーツの効果的な学習の仕方について、理解できるようにする。

ウ 豊かなスポーツライフの設計の仕方について理解できるようにする。

(3) 単元の評価規準

	ア 知識	イ 思考力、判断力、表現力等	ウ 学びに向かう力
単元 の 評 価 規 準	<ul style="list-style-type: none"> スポーツの文化的特性や現代のスポーツの発展について理解している。 スポーツは、人類の歴史とともに始まり、その理念が時代に応じて多様に変容してきていること、また我が国から世界に普及し、発展しているスポーツがあることを理解している。 現代のスポーツは、オリンピックやパラリンピック等の国際大会を通して、国際親善や世界平和に大きな役割を果たし、共生社会の実現にも寄与していること、またドーピングはフェアプレイの精神に反するなど、能力の限界に挑戦するスポーツの文化的価値を失わせていることを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> スポーツの文化的特性や現代のスポーツの発展について、課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えることができる。 スポーツの歴史的発展と多様な変化や現代のスポーツの意義や価値について、事実や理念を整理したり、自己のスポーツへの関わりを見いだしたりして、自己や社会にスポーツがもたらす影響について課題を発見することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの発展についての学習に自主的に取り組もうとしている。 スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの発展について理解し、課題を発見するための意見交換などの学習に、自ら進んで取り組んでいる。
学習 活動 に 即 した 具 体 的 な 評 価 規 準	<ol style="list-style-type: none"> ① ソフトボールの歴史的発展と変容について、理解している。 ② ソフトボールの技術の名称や行い方について、学習した具体例を理解している。 ③ ソフトボールのゲームのルール、試合方式、運営の仕方や役割に応じた行動をとれる。 	<ol style="list-style-type: none"> ① これまでの学習を踏まえて、チームが目指す目標に応じたチームや自己の課題を設定している。 ② ソフトボールを行う際の様々な危険を予見し、回避するための方法を分析し、判断できる。 ③ 作戦などの話合いの場面で、合意を形成するための調整の仕方を見付けている。 	<ol style="list-style-type: none"> ① ソフトボールの歴史、文化的特性についての学習に自主的に取り組もうとしている。 ② チームの課題を解決するための活動などを通して、学習に主体的に取り組もうとしている。 ③ 役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとしている。 ④ 合意形成に貢献しようとしている。

(4) 単元指導計画

別紙A「体育理論 指導計画・指導内容・評価規準」(15・16 ページ) のとおり

(6) 本時の位置付け

単元「体育理論」…別紙A (15・16 ページ) の1、2、6、8、11、14に相当

単元「球技(ベースボール型)ソフトボール」…全6時間中の2時間目に相当

ア 本時の目標

- ・ソフトボールがオリンピック種目へと復活したこととその背景について知ることができる。また、トッププレイヤーの技術について、ICT機器を用いて映像から学ぶことができる。(知識)
- ・グループから出た課題を確認し、検証できる。また、次回に向けての成果と課題を確認することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ・前時を振り返り、①安全面、②技術面 ③サポートの工夫について各グループで課題をまとめる活動に、主体的に取り組むことができる。(学びに向かう力、人間性等)

イ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動 番号は体育理論指導計画 ()内は4つのアクション	指導上の留意点	評価規準 (評価方法)
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶、点呼 ・3チームに分かれる。 ・本時の目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・出席確認の際に、生徒の反応の様子などから健康状態を把握する。 ・口頭で本時の流れを説明する。 ・個人のワークシートを配布し、本時の目標を確認する。 ・ワークシートにはクイズ形式での問い掛けを用意し、全員で課題解決に向けて話し合えるよう工夫する。 	
展開 ① 30分	ねらい1：ICT機器を用いた映像から、ソフトボールを学ぶ、知る		
	<ul style="list-style-type: none"> ・映像を見て学習する。 ① オリンピックにおけるソフトボールについて知る。 1、2、8(知る) ② トッププレイヤーの動きを知る。 1、2、8(みる、知る) 	<ul style="list-style-type: none"> ・オリンピックの映像を見せる。 ・なぜソフトボールがオリンピックから除外されたのか、そしてなぜ復活するのか考えさせる。 ・打撃、守備、投球の映像から、高校生が授業で学ぶには難易度が高すぎることを示唆する。そして、それがオリンピックから除外されたこととつながることを気付かせる。 	
	ねらい2：安全面、技術面、サポートの工夫について全員で考える		
	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで学習する。 6 ① 安全面…どのような工夫をすることで授業における安全を確保できるかを考えられる。 11(支える、知る) ② 技術面…動きを簡素化し誰でも楽しめる工夫を考えられる。同時に、ソフトボールの技術上達の楽しみを全員が味わえるよう工夫ができる。 8(する、支える) 	<ul style="list-style-type: none"> ・3チームを、する(安全面)チーム する(技術面)チーム みる、支えるチーム に分け、課題解決に向けて話し合わせる。 *グループごとに、映像を用意する。 ・どのようなシーンに危険が潜んでいるかイメージするのは難しいので、「バット」「ボール」「走塁」などのキーワードを提示し、危険を予知できるように支援する。 ・特にバット収納について重視させる。 ・本時のシミュレーションには、「打撃」「走塁」「守備」の要素があることに気付かせ、それぞれの技術面においてどのような障壁があるか予知できるように支援する。 	イ① (議論・観察)

展開 ② 10分	<p>③ みる、支える（サポートの工夫）…ゲームの中で、よりソフトボールの楽しさを生かすためのサポート方法を考えることができる。</p> <p>15(みる、支える)</p> <p>・ チームごとで話し合った内容について発表する。</p> <p>6 (する、みる、支える、知る)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ プレーする以外にも、みる、支えることによりスポーツを楽しめる方法があることに気付かせる。 ・ より全員が楽しめる方法を話し合えるように支援する。 ・ さまざまなサポート方法に役割を分担させる。 <p>・ それぞれの意見に対し、全て肯定的に捉える姿勢で聞く。良いと思われるものを、この後の簡易ゲームに反映させる。</p> <p>* ホワイトボードを活用する。</p>	イ③ (観察・発表)
	<p>ねらい3：各チームで考えた工夫を検証（シミュレーション）する</p>		
	<p>・ 工夫の検証を行う</p> <p>6、9、11、14</p> <p>・ 各チームから出し合った課題を検証し表現する。</p> <p>6 (する、みる、支える)</p>	<p>する（安全面）チーム・・・攻撃 する（技術面）チーム・・・守備 みる、支えるチーム・・・サポート としてシミュレーションを行い、議論した工夫が反映されるようサポートする。</p> <p>・ 全員がそれぞれの役目に対し、積極的に関わることができるよう声掛けをする。</p> <p>・ 各チームから出た課題を意識させる声掛けをする。</p>	イ② (観察・表現)
まとめ 5分	<p>・ 本時を振り返り、ワークシートに感想を記入する。</p> <p>・ 代表者が発表する。</p> <p>1、2、6、8、11、14</p> <p>・ 片付けを行う。</p> <p>・ 挨拶</p>	<p>・ 本時の目標が達成できたか、チームで取り組んだ課題解決への議論を思い出させる。</p> <p>・ 本時の体育理論の授業から、単元ソフトボールへとフィードバックできるよう導く。</p> <p>・ すすんで片付けに参加できる雰囲気を作る。</p> <p>・ 係以外の生徒も、積極的に手伝ってもらう。</p>	

【生徒のワークシートの記述より】

授業を終えて… 今日の体育理論を通して感じたことを書いてください。（感想より）

- ・ソフトボールを見たこともやったことも無かったが、今回の授業で強い興味がわいた。
- ・スポーツは「する」ものだと思っていたから、運動が苦手な私にとって、スポーツは「つらい」ものだった。しかし、運動をしなくてもスポーツに関わることは楽しそうだと感じた。
- ・「支える」ことに楽しさを感じた。同時に、スポーツをやってきた私は、たくさんの方に支えてもらっていたことがわかった。
- ・運動が苦手な私でも、見たり支えたり、安全を確保することはできる。
- ・ただ体を動かすだけが体育の授業じゃないんだ。
- ・他にもまったく知らないオリンピック種目がありそうだった。
- ・今までの体育で、自分のチームが試合しない時間はとてもつまらなかった。でも応援したり支えることで、自分もその試合に参加できて楽しい。
- ・日本が金メダルをとっていたことを、初めて知った。

2018 新編高校「体育」(丸山)「丸山」(丸山)

1年女子 体育理論ワークシート

本時の体育理論においては、

- ① スポーツの歴史的発展と多様な変化
- ② 現代スポーツの意義や価値「オリンピック・パラリンピック」
- ③ スポーツの技術と技術及びその変化
- ④ 運動やスポーツの活動時の健康・安全の確保の仕方

上記について考えると同時に、
現在皆さんが行っている、単元「ソフトボール」と関連づけた内容について、理解を深めていきます

あなたの所属するチームは、 A ・ B ・ C チームです。
今日は、 する(安全面) ・ する(技術面) ・ みる、ささえる を担当します。
前回の授業を思い出し、課題を見出し、対策を考えましょう！その後、実際にやってみます。

する(安全面) チーム *このあと攻撃を担当します
アアどんな場面が危ないかアアみんな危険が予測されるからアアその対策を練ろう。

する(技術面) チーム *このあと、守備を担当します
アアソフトボールにはどんな技術が必要とされるかアアその対策を練ろう。
打撃・走塁技術

守備技術

みる、ささえるチーム *このあと、サボートを担当します
アアどんなときささえるかアア 悪いところだけ考えよう。

授業を助けて… 今日体育理論を通して感じたことを書いてください

全日本ソフトボール
選手(ピッチャー)投
球場面

オリンピック全日本女子ソフト
ボールチームの集合写真

「オリンピック」

・オリンピックにおけるソフトボールは、1996年のアトランタオリンピックから、()として採用された。そして、2012年ロンドンオリンピックからは()された。

・2020年の東京オリンピックでは、()として、実施される。2024年の実施は、()参加国数は、()か国である。

・上野投手らの投げ方は、()投法といわれる。その由来は、風車である。

話あってみよう
知らない、ソフトボールはオリンピックの正式種目から除外されたのだからだろうか？

もし、オリンピックから、競技になくならないと思われる種目は、どんなものだろうか？

日本における、ソフトボールの歴史

- ・()年、欧米留学より帰国した東京高等師範学校教員の大谷武一が、妻が園に始めて紹介する。当時は、インドアペーシスボールや、プレイグラウンドボールと呼ばれた。
- ・()年、文部省制度の学校体育指導要目の中に入る。
- ・1940年、日本ソフトボール協会、創設。

開催地	開催国	日本の成績
1996 アトランタ	アメリカ	4位
2000 シドニー	アメリカ	2位
2004 アテネ	アメリカ	3位
2008 北京	日本	1位
2012 ロンドン	日本	1位
2016 リオ	日本	1位
2020 東京	日本	1位
2024 パリ	日本	1位

1年 組 番 名前

実践事例 2

(1) 単元名 体育理論（第3学年）

(2) 単元の目標

ア スポーツの歴史、文化的特性や現代のスポーツの特徴について理解できるようにする。

イ 運動やスポーツの効果的な学習の仕方について理解できるようにする。

ウ 豊かなスポーツライフの設計の仕方について理解できるようにする。

(3) 単元の評価規準

	ア 知識	イ 思考力、判断力、表現力等	ウ 学びに向かう力
単元の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツは各ライフステージにおける身体的、心理的、社会的特徴に応じた多様な楽しみ方があること。また、その楽しみ方は個人のスポーツに対する欲求などによって変化することを理解している。 ・生涯にわたってスポーツを継続するためには、ライフスタイルに応じたスポーツとの関わり方を見付けること、仕事と生活の調和を図ること、運動の機会を生み出す工夫をすることが必要であることを理解している。 ・人生に潤いをもたらす貴重な文化的資源として、スポーツを未来に継承するためには、スポーツの可能性と問題点を踏まえて適切な「する、みる、支える、知る」などの関わりが求められることを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かなスポーツライフの設計の仕方について、課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し、判断するとともに、他者に伝えることができる。 ・豊かなスポーツライフが広がる未来の社会について、将来の自己のスポーツ設計や未来の社会についての自己の提案を言葉や文章などを通して他者に伝えることができる。 ・ライフステージにおけるスポーツの楽しみ方やライフスタイルに応じたスポーツとの関わり方について、自己や自己を取り巻く環境の変化を予想し、自己や社会についての課題を発見することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かなスポーツライフの設計の仕方についての学習に主体的に取り組んでいる。 ・豊かなスポーツライフの設計の仕方について理解し、スポーツを多様に継続するための課題を発見し解決するための意見交換などの学習に自ら進んで取り組んでいる。
学習活動に即した具体的な評価規準	<ol style="list-style-type: none"> ① 各ライフステージにおけるスポーツの楽しみ方について理解したことを言ったり、書き出したりしている。 ② ライフスタイルに応じたスポーツの関わり方について理解したことを言ったり書き出したりしている。 ③ 生涯を通じて自己に適した豊かなスポーツライフを継続していくための手立てを理解している。 	<ol style="list-style-type: none"> ① 豊かなスポーツライフの設計の仕方について、比較したり、分類したり、分析したり、まとめたりするなどして、判断し、説明している。 ② ライフステージにおけるスポーツの楽しみ方やライフスタイルに応じたスポーツとの関わり方について自己や自己を取り巻く環境の変化を予想し、自己や社会についての課題を発見できる。 ③ 役割分担などの話し合いの場面で、合意を形成するための調整の仕方を見付けている。 	<ol style="list-style-type: none"> ① 豊かなスポーツライフの設計の仕方について、活動を通して主体的に取り組もうとしている。 ② 活動における役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとしている。 ③ 合意形成に貢献しようとしている。

(4) 単元の指導計画

別紙A「体育理論 指導計画・指導内容・評価基準」（15・16ページ）のとおり

(6) 本時の位置付け

単元「体育理論」…別紙A（15・16ページ）の13、14、16、18に相当

単元「球技(ゴール型)サッカー」…全8時間中の7時間に相当

ア 本時の目標

- ・生涯を通じて豊かなスポーツライフを実践するための「する」「みる」「支える」「知る」について、スポーツへの多様な関わり方をICT映像や話し合いから学ぶ。(知識)
- ・グループから出た課題を踏まえて、より豊かなスポーツライフの実現を確認することができる。(思考力、判断力、表現力等)
- ・「支える」を重点的に考え、6校時の授業につなげるために主体的に取り組むことができる。(学びに向かう力)

イ 本時の展開

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準 (評価方法)
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶、出欠を確認する。 ・本時の目標を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶 ・個人ワークシートを配布し、本時の目標を確認する。 ・ICT機器で本時の目標を確認させる。 	ウ①(観察)
展開① 15分	ねらい1: ICT機器を用いた映像や資料等から、スポーツライフに対する現状を学ぶ。		
	<ul style="list-style-type: none"> ・スライドや映像による学習 ① 高校卒業後、成人の運動実施率について知る。 ② 生涯にわたってスポーツに親しむにはどうしたらいいのかを考える。 ③ ライフステージ別にみたスポーツの楽しみ方を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツライフに対する現状や改善点を読み取り、問題点や改善点を考えさせる。 ・「する」だけではなく、「みる」「知る」「支える」の観点があることに気付かせる。 ・幼少期から老年期までのライフステージでは意外なものがスポーツの一つとして捉えられていることを気付かせる。 	ア③(観察)
展開② 27分	ねらい2: マイスportsライフの設計を考える。		
	<ul style="list-style-type: none"> ・グループによる学習 ① 自身のSportsライフの設計を考え、グループ内で話し合う。 ② マイスportsライフの設計で考えたことを基に、今後、自身が「する」「みる」「支える」「知る」の4つのアクションのどれに深く関わっていけるのか、また関わっていきたいのかを考え話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今までに行ってきたSportsと今後行ってみたいSportsをあげ、体力や年齢の変化とどのように関わっていけるかを考えさせる。 ・前回の授業で体験した、パラリンピック車いすバスケットボールで学んだことを関連付けて考えさせる。 	イ②(観察) ウ②(観察)
まとめ 3分	ねらい3: 「支える」にターゲットを絞り、6校時に実践する項目を見付ける。		
	<ul style="list-style-type: none"> ・発表による学習 ① 「支える」に重点を置き、サッカーで実践する項目をグループで話し合い、発表する。 ・本時の目標などの振り返り、ワークシート記入 ・片付け ・挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・より全員が楽しめて、さまざまな「支える」があることに気付けるように支援する。 ・それぞれの意見を尊重し、グループにおける話し合いが活発になるように支援する。 ・この後の簡易ゲームに反映させる。 ・体育理論を通して卒業後も様々な形でSportsに関わっていけることに気付かせる。 ・次の授業でさまざまな「支える」を実践できるように支援する。 	ア③(観察)

【生徒のグループシートの記述より】



【生徒の感想文より】

- ・実況が上手でノリノリでできた。闘争心が掻き立てられた。
- ・スポーツは「する」「みる」だけでなく違う側面を知ることができた。
- ・サッカーは得意じゃないけれど実況に褒められて楽しくできた。
- ・ボールパーソンは思ったより大変だった。
- ・インターネットやプロの画像じゃなく身近な先生のインタビューが新鮮だった。

別紙A 「体育理論 指導計画・指導内容・評価規準」

		評価規準	
		知識	思考・判断力・表現力等
		スポーツは、人類の歴史とともに始まり、その理念が時代に応じて多岐に変容してきていること。また、我が国から世界に普及し、発展しているスポーツがあることを理解している。	スポーツの、文化的特性や現代のスポーツの発展について、課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えることができる。
		現代のスポーツは、オリンピックやパラリンピック等の国際大会を通して、国際親善や世界平和に大きな役割を果たし、共生社会の実現に寄与していることを理解している。	スポーツの、文化的特性や現代のスポーツの発展について、課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えることができる。
		ドーピングは、フェアプレイの精神に反するなどの、能力の限界に挑戦するスポーツの文化的価値の消失。	スポーツの、文化的特性や現代のスポーツの発展について、課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えることができる。
		・スポーツ産業による経済的効果 ・スポーツの価値を一層高める関わり方 ・スポーツの価値の厳守	スポーツの、文化的特性や現代のスポーツの発展について、課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えることができる。
		・地域の人々の生活や社会環境にも様々な影響をもたらすこと。 ・提供者、利用者の双方が持続可能な社会の実現や共生社会の実現を視野に入れた取組	スポーツの、文化的特性や現代のスポーツの発展について、課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えることができる。
		・自己や社会についてのスポーツの意義や課題 ・持続可能な発展につながる思考や判断について、自己の考えを他者に伝えること。	スポーツの、文化的特性や現代のスポーツの発展について、課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えることができる。
		・運動やスポーツの技能は、体力と相互に関連していること。 ・個々の技能に関連した体力を高めること。 ・けがや疾病の原因となる可能や予防	運動やスポーツの技能は、体力と相互に関連していること。また、期待する成果に応じた技能や体力の高め方があること。さらに、過度な負荷や長期的な酷使は、ケガや疾病の原因となる可能性があることを理解している。
		・技術は技能という状態で発揮されること。 ・技能のグローバルスタンダード型とオリーパス型 ・型の違いによって学習の仕方が異なること。	運動やスポーツの技能は、学習を通して技能として発揮されるようになること。また技術の種類に応じた学習の仕方があることを理解している。
		・技術や戦術・ルールは、用具や用品、施設などの改良によって変わり続けていること。 ・メディアの発達による影響 ・用具等の改良やメディアの発達その影響 ・スポーツそのものをゆがめる可能性	現代のスポーツの技術や戦術、ルールは、用具の改良やメディアの発達に伴い変わり続けていることを理解している。
		・技能の上達過程 ・3つに分ける考え方 ・自己に適した練習法を選択すること。 ・上達に応じて次の課題を設定すること。 ・フラットやランプの状態があること。	運動やスポーツの技能の上達過程にはいくつかの段階があり、その学習の段階に応じた練習方法や運動観察の方法、課題の設定方法などがあること。また、これらの獲得には、一定の期間が掛かることを理解している。
		・気象条件の変化、様々な危険を予見 ・けがや事故防止のための対策 ・各場面での適切な対応方法	運動やスポーツを行う際は、気象条件の変化など様々な危険を予見し、回避することが求められていることを理解している。
		・運動やスポーツの技能と体力及びスポーツによる障害 ・スポーツの技術と技能及びその変化 ・運動やスポーツの上達過程 ・運動やスポーツの活動時の健康・安全の確保の仕方 ・上記4点を踏まえた、計画及び実践	運動やスポーツの効果的な学習の仕方について、他者に伝えることができる。

入学年次（年間6単位時間）

その次の年次以降（年間6単位時間）

指導計画		指導内容	評価規準	思考・判断力・表現力等	学びに向かう力、人間性等
13	ライフステージにおけるスポーツの楽しみ	<ul style="list-style-type: none"> 各ライフステージにおける特徴に応じた多様な楽しみ方 各ライフステージにおける楽しみ方は、個人にとって変化する。 	<p>スポーツは、各ライフステージにおける身体的、心理的、社会的特徴に応じた多様な楽しみ方があること。また、その楽しみ方は、個人のスポーツに対する欲求などによっても変化することを理解している。</p>		
14	ライフスタイルに応じたスポーツとの関わり方	<ul style="list-style-type: none"> ライフスタイルに応じたスポーツの楽しみ方を見付けること。 ライフスタイルに応じた無理のないスポーツへの関わり方 仕事と生活の調和 運動の機会を生み出す工夫 多様な関わり方を実現するための具体的な設計の仕方 	<p>生涯にわたってのスポーツを継続するためには、ライフスタイルに応じたスポーツとの関わり方を見付けること、仕事と生活の調和を図ること、運動の機会を生み出す工夫をすることなどが必要であることを理解している。</p>		
15	スポーツ推進のための施策と諸条件	<ul style="list-style-type: none"> スポーツ推進の様々な条件整備 我が国のスポーツ基本法やスポーツ基本計画等のスポーツ推進に関する法律やその背景 	<p>スポーツの推進は、様々な施策や組織、人々の支援や参画によって支えられている。</p>	<p>豊かなスポーツライフの設計の課題を発見し、課題を解決し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えることができる。</p>	<p>豊かなスポーツライフの設計の課題を発見し、課題を解決し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝えることができる。</p>
16	豊かなスポーツライフが広がる未来の社会①	<ul style="list-style-type: none"> 貴重な文化的資源、財産としての、スポーツ 健康で生き生きとした生活をもたらし、様々な人々とつながる可能性 過度な運動による健康への悪影響 勝利を優先し、人間関係を悪化させざる問題 人生に潤いをもたらす適切な関わり方 豊かなスポーツライフ実現のための「する、みる、支える、知る」などの関わり 	<p>人生に潤いをもたらす貴重な文化的資源として、スポーツを未来に継承するためには、スポーツの可能性と問題点を踏まえて適切な「する、みる、支える、知る」などの関わりが求められていることを理解している。</p>		
17	豊かなスポーツライフが広がる未来の社会②				
18	「する」「みる」「支える」「知る」などの多様な関わり方の構想や設計	<ul style="list-style-type: none"> 自己や社会の課題を発見し、将来の豊かなスポーツライフの実現に向けて課題のよりよい解決に向けて、思考し判断すること。 自己の考えを言葉や文章などを通して他者に筋道を立てて伝えること。 	<p>豊かなスポーツライフの設計の仕方について理解している。</p>		

実践事例1…1, 2, 6, 8, 11, 14 (太線囲み塗りつぶし)
 実践事例2…13, 14, 16, 17, 18(2点鎖線囲みの塗りつぶし)

2 検証授業における成果と課題

(1) 体育理論のカリキュラム・マネジメント

経験者が多い種目では、「はじめ」(初回)に体育理論を設定し、経験の有無に差がある種目では、その種目を経験した後に配置する等、体育理論を取り扱う時間を工夫することで、関連付ける単元に対する意識が高まるとともに、多様な視点で捉えられるようになった。また、安全への配慮や知識の重要性に気付くことができ、用具の準備・片付け等を積極的に行うようになった。

一方で、一単元で実施するだけでは、十分に知識を深めていくことはできないので、他の単元でも同様に計画的に体育理論を実施していくとともに、保健体育科における教材等の共有化を図り、体制を整えていく必要がある。

(2) 協働的な学びの工夫

事前にテーマと役割分担を明確に提示したり、グルーピングを工夫することで、話し合いが活発化された。また、生徒がよりアイデアを出せるように、ICT機器を活用し、視覚的にヒントを共有化することで、意見が活発に出るようになった。さらに、グループでの話し合いの後、発表の場を設けることで、他グループとアイデアの共有化を図ることができた。

そして、運動やスポーツの得意、不得意を問わず、仲間と気付きの喜びを共有でき、全員が関連付けた単元(種目)を楽しむための「共生の視点」をもたせることができた。

話し合いを活性化させ、気付きや深い学びを実現していくためには、一定程度、話し合いのルールを示す必要がある。また、話し合い活動をより活発に行うために、声かけやICT等による気付きを与えるなど、教員の支援が重要となってくる。また、知識と技能を関連付けて捉え、技術の向上に向けて導いていくことが必要である。

(3) 運動・スポーツへの多様な関わり方に気付かせる工夫

安全に対する意識が高まるとともに、準備・片付け等の協力の意識が高まり、主体的に取り組むようになった。また、体育が好きな生徒だけでなく、苦手意識をもつ生徒からも「楽しかった」という声や「好きになった」という意見が多く出た。自分に適した運動やスポーツへの関わり方への気付きがあったと考えられる。

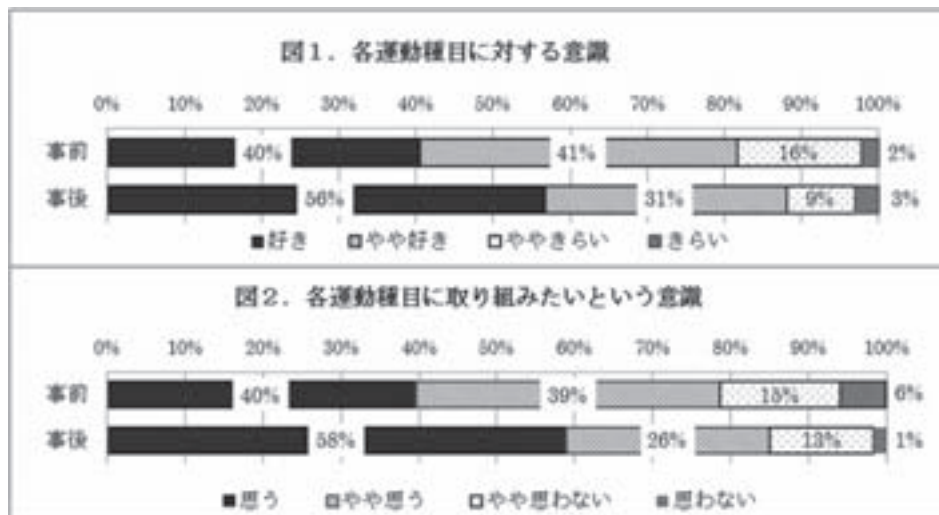
また、応援や実況による「支える」を体験することで、「する」側の生徒の意欲も高まり、試合中のプレーやモチベーションの向上につながった。このことから、「支える」楽しみに気付くことができたと考えられる。

しかし、多様な関わり方に気付かせるためには、事前の十分な資料や教材等の準備に時間を要するので、計画的に行う必要がある。

3 アンケート分析

本研究では、運動・スポーツへの肯定的感情や技能の向上、運動への関わり方などに関する意識の変化について、単元の事前と事後にアンケート調査を実施し、検証した。

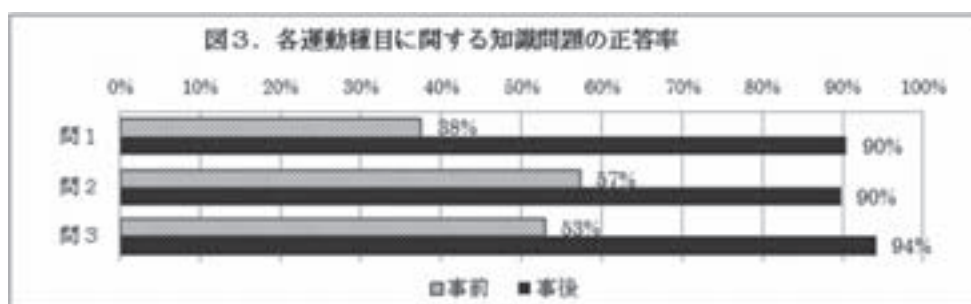
(1) 運動・スポーツへの肯定的感情

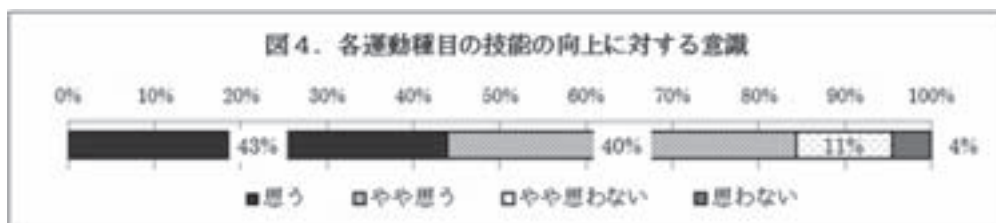


「運動（体育や部活動）やスポーツをすることは好きか。」「運動（体育や部活動）やスポーツをすることは得意か。」という質問について、事前と事後では大きな差は見られなかったが、「実施した種目は好きか。」という質問について、「好き」と回答した生徒は、事前40%から事後56%に大幅に増加し、「ややきらい」と回答した生徒が16%から9%に減少した（図1）。また、「実施した種目をやりたいと思うか。」という質問について、「思う」と回答した生徒が事前40%から事後58%に大幅に増加し、「やや思わない」と回答した生徒が15%から13%、「思わない」と回答した生徒が6%から1%に減少した（図2）。「バスケットボールがもっと好きになった。」「最初は苦手だったけどまあまあ好きになった。」「ソフトボールが好きではなかったが、今回の授業を通して、スポーツには様々な視点から参加することができると分かり、ソフトボールが好きになった。」といった記述もあり、授業で実施した種目への有能感が高まっていることから、各種目で体育理論と関連付けた学習を行うことで、運動・スポーツへの有能感が高まったと考えられる。

(2) 知識及び技能の向上

各運動に関する知識問題3題の正答率は、事前では40~50%程度であったものが、事後では全てで90%を超え、大幅に増加し、各種目に対する知識が身に付き、理解が深まったと考える（図3）。

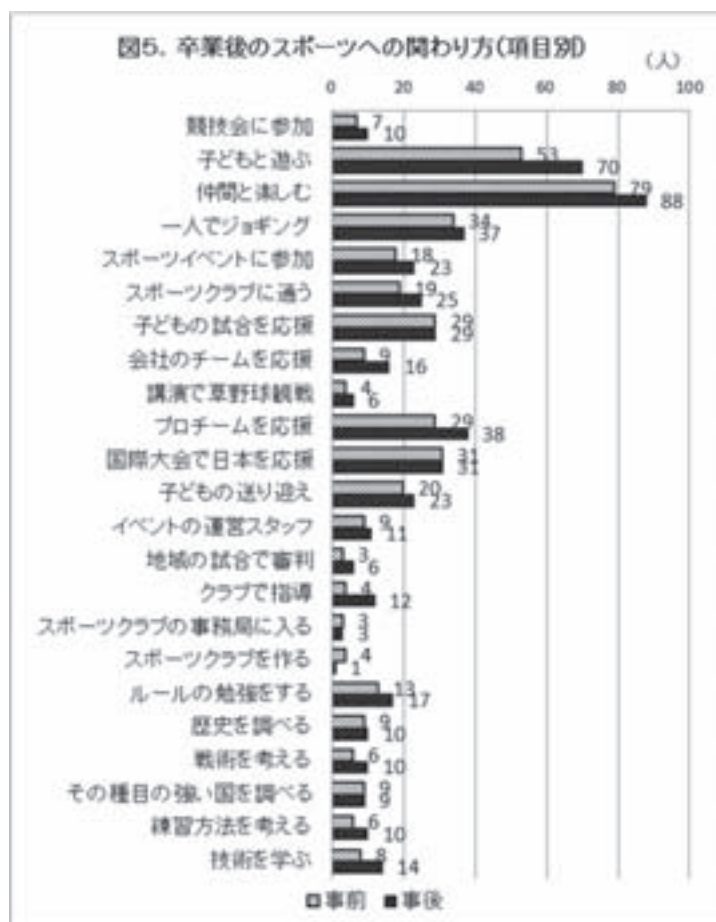




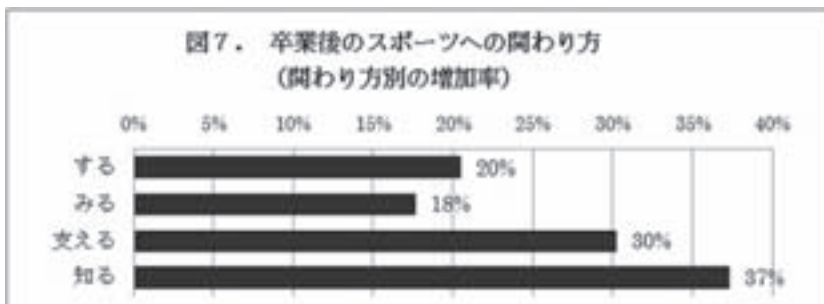
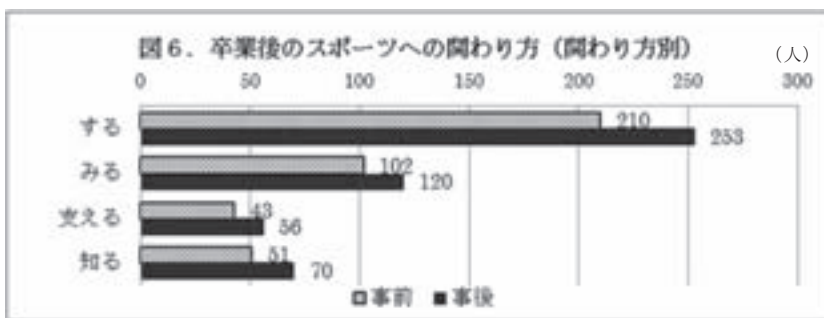
また、事後アンケートの「実施した種目がうまくなったと思うか。」という質問について、「思う」・「やや思う」と肯定的な回答をした生徒が 83%を占め、多くの生徒が授業で実施した種目の技能の向上を感じている（図4）。「体育理論を学ぶことで、ただスポーツをやるだけではなく、どうすればよりよく動くことができるかということや、スポーツをする意味について考えることができ、体育授業への理解が深まり、意欲も高めることができた。」「自分はソフトボール部に入っているのに、ソフトボールについての知識がとても少ないと気付いた。特に、プロのプレーを見るのがほとんどないので、そういったことをもってしていけば、技術の向上につながるし、ソフトボールの楽しみも増やせると思った。」といった記述もあった。これらのことから、各運動領域と体育理論を相互に関連付けて学習することで、知識の重要性を一層実感し、知識・技能が向上するとともに運動・スポーツに対する肯定的感情の向上も期待できると考える。

(3) 運動・スポーツへの関わり方

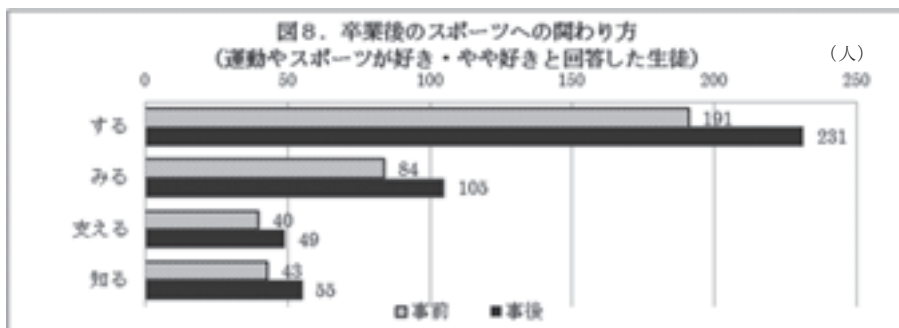
「どのように卒業後もスポーツに関わりたいか。」という質問について、全24項目中の18項目で「卒業後も関わりたい」と回答した生徒が増加した（図5）。「卒業後も大学とかクラブに入ってスポーツを継続したいと思った。」「卒業後は自分がスポーツをする機会は少なくなると思うが、試合を応援したり、調べて学んだり、運営や企画に関わったりと、これからもスポーツを楽しんでいきたい。東京オリンピックやパラリンピックがあるので選手を応援しようと思った。」といった記述もあり、体育理論の授業で運動・スポーツへの多様な関わり方に気付くことで、卒業後の運動・スポーツへの関わり方への意識が変容したと考える。



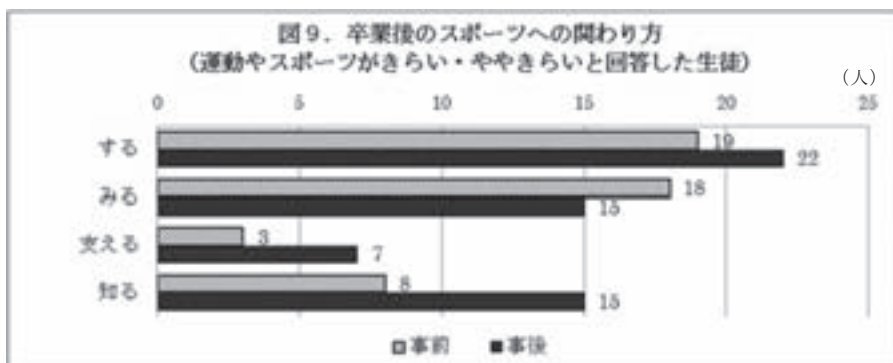
また、同質問の各回答項目を「する・みる・支える・知る」のそれぞれの関わり方で分類してみると、全ての関わり方について増加した（図6）。関わり方別に事前から事後の増加率を比較すると、「知る」が37%、「支える」が30%と特に高かった（図7）。「今まで、やるだけだったバスケットボールの歴史を知ることができ



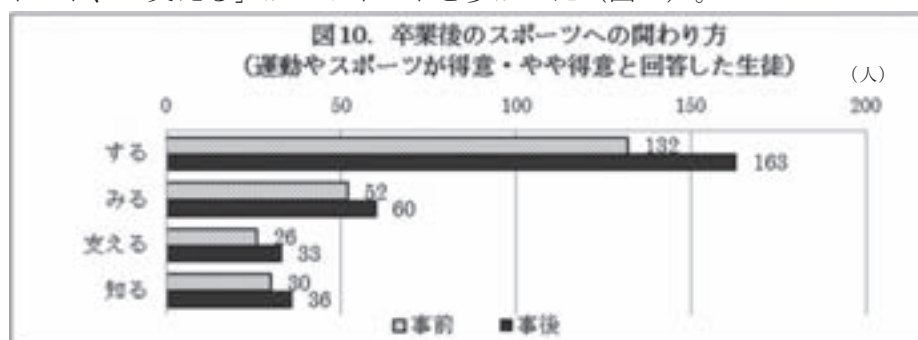
て良かった。大好きなバスケットボールでも知らないことがあるのだなと思った。」「実際に『支える』立場になってみて、支える人の大切さが分かった。」「自分がやる以外でも応援など、色々な形で関わっていきたいと思った。」といった記述も多くあった。体育理論の授業で運動・スポーツへの多様な関わり方について学ぶことで、これまで「する」が中心だった生徒の運動・スポーツへの関わり方についての視野が広がり、特に「支える」、「知る」という視点で関わりたいという意識が高まったと考える。



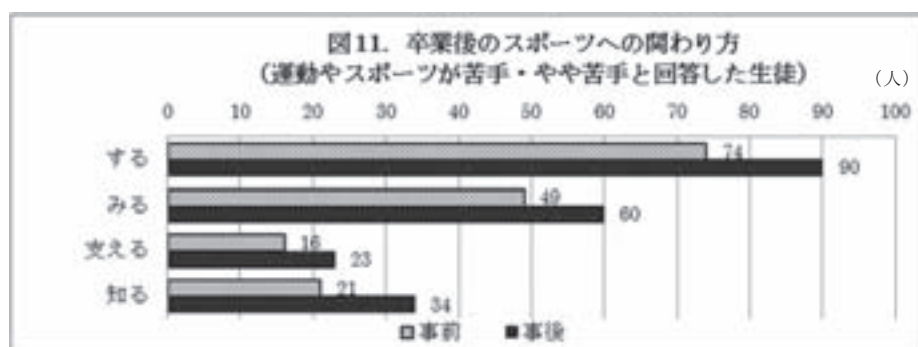
また、同質問を「運動（体育や部活動）やスポーツが好きか」という質問について「好き」・「やや好き」、「きらい」・「ややきらい」と回答した生徒別に事前・事後で比較すると、「好き・やや好き」と回答した生徒は、事前・事後ともに「する」が最も多かった。また、増加数は、「する」が40ポイント、「みる」が21ポイントと多かった（図8）。



「きれい・ややきれい」と回答した生徒は、事前・事後ともに「する」が最も多いが、事後では「知る」が大きく増加し、「みる」と同数で2番目に多くなった。また、増加数は「知る」が7ポイント、「支える」が4ポイントと多かった（図9）。



また、同質問を「運動（体育や部活動）やスポーツが得意か」という質問について「得意」・「やや得意」と回答した生徒と、「苦手」・「やや苦手」と回答した生徒別に事前・事後で比較すると、「得意・やや得意」と回答した生徒は、事前・事後ともに「する」が最も多かった。また、増加数は「する」が31ポイント、「みる」が8ポイントと多かった（図10）。

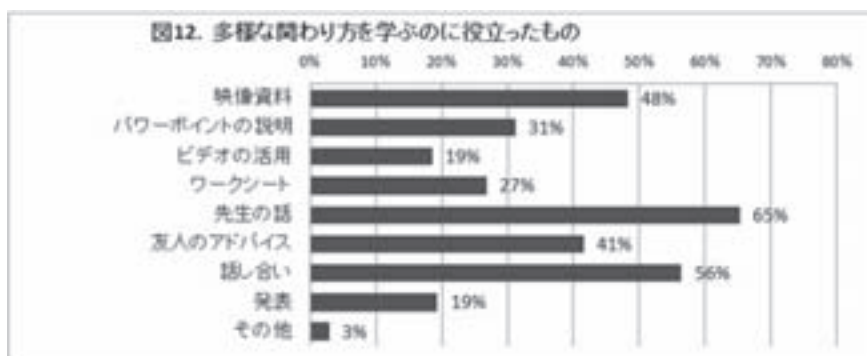


「苦手・やや苦手」と回答した生徒は、事前・事後ともに「する」が最も多かった。また、増加数は「する」が16ポイント、「知る」が12ポイントと多かった（図11）。

運動が「好き」又は「得意」な生徒の感想の中には、「今回の授業の中で一番『支える』立場での活動が重要だと思った。私は、普段部活でプレイヤーとして活動しているが、多くの人の支えがあってスポーツは成り立っているのだと強く実感した。」といった記述があり、これまで「する」が中心だった運動・スポーツへの関わり方が、授業で「支える」立場を経験することで、「支える」存在の大切さに気付くことができたと考える。また、運動が「苦手」な生徒の感想の中には、「自分は運動が苦手なので体育の授業というと、本当の意味で授業に参加していると言うよりは、できるだけ皆の足かせにならない様に努めているばかりだった。今回の授業では、支えるということも大切な分野だということを重視したカリキュラムで、初めて体育の授業で率直に楽しみながら取り組めたと思う。」といった記述もあり、体育理論の学習により、「する」が中心であった運動・スポーツへの関わり方から「支える」という別の関わり方に気付き体験することを通して、自己に適した関わり方を発見できたことは大きな意義があったと考える。自己に適した関わり方を見つけることで、運動・スポーツを行うことに消極的な生徒も、新たに運動・スポーツの楽しさや喜びを味わい、興味・関心が高まることが期待できる。

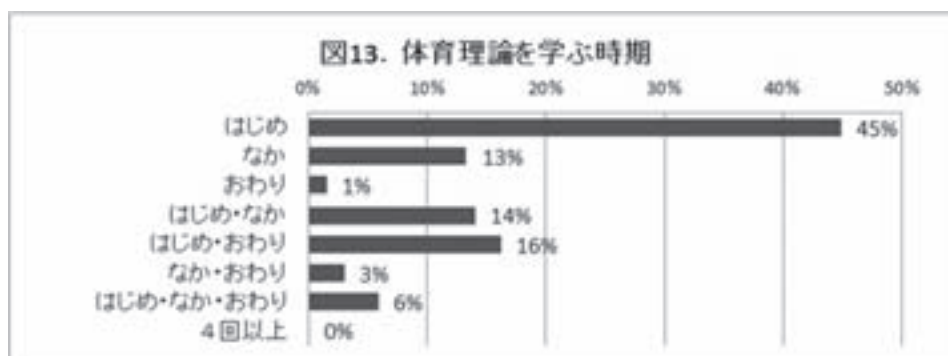
(4) 教師の指導の工夫

「多様な関わり方を学ぶ中で、役立ったものは何ですか。」という質問について、「先生の話」と回答した生徒の割合が 65%と最も多く、次いで、「話し合い」56%、「映像資料」48%、「友人のアドバイス」41%と回答した生徒の割合が多かった。



(図 12) 「先生の話」が最も多いことから、教員が授業の目的を明確化し、意図的に授業を行うことが非常に重要であると考えられる。また、「分かりやすく、皆と楽しく話し合いながら学べたので頭にも入った。」、「最初の話合いから実技への取組がよかった。」といった記述もあり、授業の中で生徒同士が関わり、教え合いや話し合い活動をしたり、助け合いやそれぞれの役割を果たすような活動を行うことは、体育授業を楽しみと感じるとともに深い学びとするために有効だと考える。また、「トッププレイヤーの映像を見ることで、それ以降の授業でイメージを持って取り組むことができた。」、「卓球の上手な人のプレーを皆で見たのが学びにつながった。」といった記述もあり、ICT機器の活用は生徒の深い学びを助ける授業の工夫として非常に有効だと推察する。

(5) 体育理論の配置



「いつ、体育理論を学ぶのが良いと思いますか。」という質問について、「はじめ」と回答した生徒が最も多く 45%、次いで「はじめ・おわり」16%、「はじめ・なか」14%、「なか」13%という順に多かった(図 13)。「体育理論の後のスポーツは、少しだけ感じ方が違う気がしました。」、「事前に体育理論で色々なことが分かっていると、スポーツをするのがより楽しくなる。」といった記述もあり、運動領域の授業の前半に体育理論を学ぶことで、知識の重要性をより一層実感するとともに、興味関心も高まり、後の運動領域の授業をより充実したものにする可以考虑。

また、複数回と回答した生徒の中には、「どの種目でも体育理論を取り入れてほしい。」といった記述もあり、体育理論の重要性を感じる結果となった。今回のソフトボールのように、生徒がこれまであまり経験のない運動種目の場合は、事前に運動領域の授業を実施し、その運動の特性等を理解した後に体育理論を学ぶことで理解が深まることも考えられるため、各校の生徒の既習状況や特性、カリキュラムに応じて配置を工夫することも必要である。

VI 研究の成果と課題

本研究では、体育理論を効果的に実践し、生涯を通じて運動・スポーツを継続できる資質・能力を育成するための授業研究を行った。

効果的に体育理論を実践するための視点として、体育理論のカリキュラム・マネジメント、協働的な学びの工夫、運動・スポーツへの多様な見方・考え方に気付かせる工夫を行った。

1 体育理論のカリキュラム・マネジメント

生徒の経験が少ない種目においては、単元の「はじめ」に体育理論を実施し、種目の特性や、歴史、オリンピックとの関連性などを学ぶことを通して、その種目に興味を持ち、その後の授業において、主体的に参加する態度が引き出された。種目に関する新たな知識を習得することで、生徒の興味関心を引き出したと考えられる。また、安全に種目を行うための配慮や、準備・片付けに主体的に取り組む等の姿勢がみられた。また、生徒の経験が多い種目においても単元の「はじめ」において実施したところ、「新たなことを知ることができて、もっと、種目を好きになった」など、種目に対する肯定的な意見が増え、知識の重要性についても一層実感することができたと考える。

一方、卒業年次では、豊かなスポーツライフにつなげるため、「支える」に視点を置いて、単元の「おわり」に運動・スポーツへの関わり方を考えさせる体育理論を実施した。経験も多く、世界的にメジャーな種目であるにもかかわらず、実況や応援、ボールパーソンといった大会運営という「支える」関わり方を改めて認識し、実践する知ること、「また、やりたい」「卒業後もスポーツに関わりたい」といった意見があり、生涯を通じて運動・スポーツを継続する資質・能力の育成に有効であったと考える。

アンケート結果では、体育理論を運動領域の「はじめ」で学びたいという回答が最も多かった。また、「全ての種目で体育理論を実施して欲しい」という意見もあった。

以上のことから、生涯を通じた豊かなスポーツライフを築ける資質・能力を育成するためには、入学年次から卒業年次まで系統性をもたせ、計画的に学校全体の指導計画と各学校の実態に応じて体育理論を実践していく必要がある。そのためには、運動領域の一単元で実施するのではなく、他の単元でも計画的に実施することが必要であり、種目の特性や生徒の既習状況等を考慮し、運動領域の単元の何時間目で実施するのか、保健や他の教科との関連付け等を考慮し、保健体育科全体での共通理解を図ることが重要である。

2 協働的な学びの工夫

グループでの話し合い活動や発表等の協働的な学びの工夫の場面を設定し、課題や考え方等について共通理解を図ることを通して、「する」「みる」「支える」「知る」という運動・スポーツへの多様な関わり方について気付かせることができた。また、仲間との話し合いや教え合いにより、考えたことを実践してみたいという意欲につなげることができた。

そして、運動・スポーツへの関わり方についての視点が広がり、運動・スポーツの得意・不得意、好き・嫌いにかかわらず、種目に対する好意的な感情につながった。また、各グループで考えた意見を発表し、全体で意見や考え方を共有することで、仲間と一緒に種目を楽しむ「共生の視点」を持たせることができた。運動領域の授業では、グループで考えた運動・スポーツへの関わり方で、主体的に活動していた。

指導の工夫として、ICT機器を活用することを通して、視覚的に共通のイメージをもた

せることで、話し合いが停滞する場面においても気付きを与え、話し合いを活性化させることができた。

教師からのヒントや、話し合いのルールの設定、グループ分けなど、生徒の実態に応じた工夫と配慮が必要であること、知識と技能を関連付けて、どのように習得させていくかということを検討する必要がある。

3 多様な関わり方に気付かせる工夫

体育理論の実践を通して、「する」「みる」「支える」「知る」の視点から種目への関わり方について考え、実践する場面を設定したことで、運動・スポーツへの多様な関わり方に気付き、種目に対する興味関心が高まった。

今までの運動領域の授業では、種目の技能を高めることに重点がおかれる傾向もみられた。技能を習得した際、達成感や運動有能感を得られる一方で、習得できなかった場合、運動・スポーツ嫌いや、運動・スポーツ離れの要因の一つともなりうる。今回、「する」「みる」「支える」「知る」の視点から種目への関わり方を生徒に考えさせることで、自ら考えた関わり方で種目を「やってみたい」という主体性が引き出された。また、種目への多様な関わり方に気付き、仲間と工夫することで、深い学びにつながったと考える。特に、「支える」の視点は、運動・スポーツへの肯定的感情を高め、卒業後も運動・スポーツを継続したいという意識を高めることが分かった。「運動が苦手なことで迷いが掛からないようにしていたが、『支える』ということも大切な分野だということを知り、初めて率直に楽しみながら取り組めた」という生徒もおり、運動有能感を高めることも推察される。また、応援があることにより、プレーの質が変わり、「する」生徒のモチベーションも上がった。「支える」ことの意義への気付きにもつながった。そして、「支える」という役割があることで、授業で試合の順番を待つと感じることもなくなった。以上のことから、体育理論を学ぶことで、生徒の実技種目への関わり方が大きく変化したことが分かる。

本研究の「研究の視点」は、どの単元においても教材や学習環境の準備に時間を要することや、生徒の意見や活動を予測し、十分に引き出すための授業計画を立てることが必要である。また、生徒一人一人の意欲や理解の深まり、技能の向上等を見取るための評価の観点や評価方法について検討していく必要がある。

今後、上記の課題を解決し、体育理論を効果的に実践していくために、保健体育科の教員間で共通理解を図り、一体となって取り組んでいくことが重要であると考えられる。

平成 30 年度 教育研究員名簿

高等学校・保健体育

学 校 名	職 名	氏 名
東京都立荒川商業高等学校	教 諭	◎後藤 良宏
東京都立青井高等学校	主任教諭	小川 さおり
東京都立新宿高等学校	主任教諭	田久保 裕之
東京都立小山台高等学校	主任教諭	柿崎 優子

◎世話人

〔担当〕 東京都教育庁指導部指導企画課
指導主事 中村 美咲

平成 30 年度

教育研究員研究報告書
高等学校・保健体育

東京都教育委員会印刷物登録
平成 30 年度 第 135 号

平成 31 年 3 月 発行

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6849
印刷会社 康印刷株式会社